

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	留学生と日本人学生の友人構築
Author(s)	ラデン ユスフ クルニアワン,
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集, 30期 : 26 - 41
Issue Date	2015-10-30
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00038674
Right	
Relation	



留学生と日本人学生の友人構築

ラデン・ユスフ・クルニアワン

研究の背景

留学生は、来日前に日本語を意識して学習することは少なくない。そして日本人と友達になりたいと思っている。だが、来日後にあまり日本人学生と関わったり、友達とうまくいかないという留学生の声もよく聞かれる。その影響もがあつてか、日本語会話能力が向上しないこともある。

なぜ留学生は日本人学生の友達を作るのが難しいのだろうか。日本人学生側の態度や意識にその理由があるのではないか。そのことを考える手がかりになる先行研究として、以下のような研究がある。

潘英峰・義永美央子ら（2014）によれば、日本社会を担う子供たちにとって、自他の違いを認めながら、相手の立場を尊重しようとする態度を育むことは喫緊の課題である、と述べている。そして、中学生は異文化を持つ外国人にどのような態度をとるのか、日中米の中学生を対象に、アンケートを通じて、外国人転校生に対してどのような態度をとるのかを明らかにしている。調査の結果、中国人学生は最も受容的な態度を持つと分かった。逆に、日本人学生は外国人の転校生に対して話してみようと思う意思があるが、問題が生じたら解決を探ろうと思う態度はやや低いと見られている。さらに、中国男子は、米国女子・日本女子より受容的だとわかった。この現象から、やはり性別や国の社会環境により異文化に対する受容態度も異なるということが分かった。

園田智子（2014）による研究では、現在、他国のの人々と接する場面が多くなり、日本人学生にはグローバル人材となる必要性が高まってきたことを指摘している。そのため、コミュニケーションスキル、特に自己表現と自己主張（アサーション）スキルも必要な項目であるという。この研究では異文化間のコミュニケーション側面であるアサーションに注目し、アメリカ、中国、タイ在住の大学生と日本人学生を比較することによって、それぞれの国の大学の大学生のアサーション度に差異はあるのか、さらに、性別の違いによってアサーション度に差があるのかを明らかにしている。本稿では、アメリカ、中国、タイ在住の大学生と日本人学生を対象に、質問紙（アンケート）を通して調査を行った。最後に、結果についてアサーション度を順に言うと、アメリカ・中国、タイ、日本となっている。つまり、日本人学生は平和を重視に、安全な立場を取り、コミュニケーションをする際、自分の意見はあまり述べないという。さらに、性別によるアサーション度はアメリカ、中国、タイ学生には有意に見られなかったが、日本人学生には見られる。つまり、日本人学生のアサーション度はやや低いと分かった。

このような日本人側の問題だけではなく、留学生側の状況も友人関係の問題を考える上で参考とすべきだろう。留学は海外で文化、社会を学んだり、旅行したりすることで楽しい一方、悲しい想いに抱える留学生も少なくない。留学中の人間関係の悩みに関する問題が大橋敏子（2008）によって多く指摘されている。どのような留学生でも失恋から先生との関係の問題にまで及ぶ多岐にわたる問題が起こる可能性がある。うつ病をかかえて自殺に至るまでのケースもある。本書では研究目的として様々な国から来た留学生を対象にアンケートや実際の事例の分析を通して、留学生のメンタル事情や要因を把握、適切な危機介入方法を手に入ることを挙げている。その結果として、留学生が抱える問題に対する危機介入と予防を提言する。その一つは「つなぐ」カウンセリングであるという。

先行研究から異文化に対する様々な留学生と日本人学生が抱えている問題があると分かった。本研究では留学生と日本人学生は付き合う際、どのような障壁があるかを探って異文化に対する理解度を高めてより良い関係の構築仕方をを見つける。最終的に、国際化世界という居場所の中で留学生と日本人学生が共生調和な生活を送れるようにと期待されている。

研究目的

本研究では、留学生と日本人学生の付き合いをより良くするために、付き合う際、いったいどのような問題、障壁があるのか、お互いに異文化理解を向上させるために、日本人学生とどのような付き合い方をすればいいのかを探りたい。

本研究の目的は以下の三つである。1) 留学生と日本人学生が友人として付き合う際、どのような問題あるいは障壁があるのかを探る。2) 日本人学生は留学生に対してどのように付き合えばいいのかという有効な方法を見つける。3) 留学生は日本人学生に対してどのように付き合えばいいのかという有効な方法を見つける。

調査の対象者と方法

広島大学に所属している日本人学生と留学生を対象として調査を行った。調査の方法は以下のとおりである。個人情報を守るために留学生の呼び方は発表では（中国、欧米、アジア・ほかの国々）にする。

1. 半構造的インタビューによる調査

- A. 留学生から見た日本人学生との友人構築。
- B. 日本人学生から見た外国人留学生との友人構築。

2. データ分析

3. まとめと考察：問題分析を通して、最終的により良い付き合い方について示唆を得る。

インタビューの項目

園田智子（2015）では日本人中学生は外国人の学生に対してのアサーション度は中国の学生などと比べて未だに低いと指摘している。実際に現在の日本人大学生（留学生も）はそうであるのかを調べるために、質問1～2を挙げた。また、中山千夏（2007）で著者は「自分から他人を話しかけ始めれば友達を作れる」と示唆をして、本当に日本人学生・留学生は自分から話しかけ始めるのかどれくらい努力しているのかを調べたいため、質問3～4を挙げた。質問5ではより関係を深めるために、日本人学生・留学生は具体的な行動をするのかを検討したい。

留学生と日本人学生に対する質問項目は同じで、以下のとおりである。

A. 日本に来て日本人の友達を作れましたか。「はい」の場合、どうやって作りましたか。「いいえ」の場合、どうしてまだいないですか。

B. 日本人学生の友達を作りたいという気持ちがありますか。「はい」か「いいえ」の場合も、それはどうしてですか。

C. 自分から日本人学生に話しかけますか。それはどうしてですか。「はい」か「いいえ」の場合も、それはどうしてですか。

D. 日本人学生ともっと関わるために、何かイベントや部活に参加しましたか。「はい」の場合、どのようなイベント、または部活に参加しました。それはどうでしたか。「いいえ」の場合、どうして参加しないですか。

E. 日本人学生と気が合うと感じて長く話をしたことありますか。「はい」の場合、それはいつですか。どんなときだったんですか。「いいえ」の場合、それはどうしてですか。チャンスがないか、それとも自分からあまり話さないからですか。そして、関係を保つために連絡先交換などしましたか。「はい」の場合、交換したらやり取りしましたか。そして、一緒に遊んだり食べたりしましたか。「いいえ」の場合、どうして交換しないですか。

分析の方法

面接から得られたデータを分析するにあたっては、Ellen Taylor-Powell と Marcus Renner（2003）による Analyzing Qualitative Data を利用した。

一段階では、データを認識すること。すなわち、データを把握するためには何回かデータを読むことが必要である。時々、収集したデータには必要ではないデータも入っている。

二段階では、分析に注すること。ここでは、キーワードの文章を取り上げる。本研究ではそれを実行するために色をつけることにした。さらに、目的は何か、何を見つけようとしているのかを改めて思考する。

三段階では、データをカテゴリーに分けること。本稿では色をつけて、どのようなデータなのによってわかる。黄色のハイライトは対象者が持っている積極的な態度を、紫

は消極的な態度を表す。オレンジ色の文字は相手に対する肯定的な意見を、灰色のハイライトは相手に対する否定的な意見を表す。また、下線部は好ましい状態を、太いフォントの文字は、好ましくない状況を表す。

四段階では、カテゴリーによるパターンや関連性を認識すること。ここでは対象者の回答からみた類似点と相違点を把握して、要約をして結果の大テーマとして肝心のあるカテゴリーを作成すること。

最後の段階では、留学生と日本人学生がコミュニケーションする際に、起きる障壁とそのありうる解決のし方を論じるすること。

結果

データを収集するために様々な国から来た留学生をインタビューした。彼らはインドネシア、インド、スリランカ、タイ、セルビア、ハンガリー、ドイツ、イラク、中国、ベトナムの留学生である。留学生たちは同じ国籍、同じ大陸からきた人だといえども、やはり彼らは自分の個性を持った意見を抱いていると分かった。一方、様々な学部生の日本人学生もインタビューした。彼らは1・2・3・4年生の日本語教育、教育、経済、総合科学、経済、文学、生物学の学生である。留学生13人、日本人学生12人インタビューした。その留学生の中で女性が8人で、男性が5人いる。日本人学生の中で女性と男性が両方も6人いる。合計で、25人をインタビューした。

留学生と日本人学生を留学生と日本人学生についての友人構築について質問したら、積極的に色々な努力をして外国人・日本人を持つ友達を作ろうとしている人もいるし、友人を作りたいがっているが、あまり努力しない人もいるし、外国人・日本人の友人を作ろうとしない人もいる。

留学生と日本人学生は付き合う際、様々なコミュニケーションの問題が出てきたとインタビューから分かった。それらの問題は自分の消極的な態度、留学生・日本人に対する個人的な偏見、自分自身に対する否定的な意見、迷いや不安の問題である。それらの問題から見ると4つのカテゴリーの問題に分けた。

コミュニケーションの障壁・問題

インタビューした結果、留学生が経験した日本人学生との付き合うことはもちろん良いことも少なくないが、それでもコミュニケーションなどの問題が出てきた。以下、4つのカテゴリーに分けて分析を試みる。

A. 迷いや不安

1. 文化が違うので、まずいことをやってしまうのが不安

得られたデータからすると、国籍が異なる学生と初めて会った時、何を話せばいいのか、どうやって話しかければいいのか、時々迷う。しかも、文化が異なるので、相手に対する嫌な態度をしてしまうのが不安がある対象者がいると分かった。対象者の中から、留学生でも日本人学生でも、もちろん気軽に話しかける人もいないわけがない。また、このような不安がある、散々悩んだ上、自ら留学生・日本人学生に話しかけない傾向があると回答した人もいると分かった。

文化の違いから、相手が良く思っていないことをやってしまうことが不安です。
(対象者20/男性/日本人学生)

話しかけられるまで待つ傾向があります。時々話しかけられます。もしかしたら日本語の問題でもあります。正しくない日本語を喋ってしまうのが恐れています。(対象者9/女性/インドネシア)

その外国人が日本語ができれば安心して話しかけますが、英語ができるあまりの外国人には話さない傾向があります。(対象者2/女性/日本人学生)

異文化コミュニケーションにおける不安は Wang, Sun, & Liu (2010) が紹介した。コミュニケーションは口頭と身振りを通して2つの方向からの情報交換である。話者の文化背景を介して起こる過程である。二人の人が対話して彼らはコミュニケーションの不安を表すいくつかの感情、思考、不安、希望を持っている。Horwitz, Horwitz, and Cope (2001) では、不安を感じるのは第二次言語(外国語)習得するのは未だに完成していないからだと述べている。自分のネイティブの言語で対話するとき、あまりコミュニケーション障壁にぶつからないが、外国語を勉強するときは、そうではない。外国語でコミュニケーションする時、いくつかの複雑なコミュニケーションの素材を通して、知らない文法と社会知識と文化は破断されるのが問題として見られる。したがって、これは話者を恐怖やパニックなどに向かって導かれる。

つまり、恐怖というものは基本的に人間の自然な一つの感情である。しかし、コミュニケーション、特に異文化コミュニケーションをする際、それは主な原因となっている。もちろん、相手(異文化の人)の文化と考え方を知りたいと回答した対象者がいくつかいる。それを実行するためには、まず、その恐怖という境を超える必要がある。様々な失敗を恐れながらも、友人を構築するために異文化コミュニケーションを徹底的に行えば恐怖もなくなるだろう。ようするに、考えすぎないでとりあえず話しかければいいだろう。失敗し

たら相手あまり反応なくて、ほかの人に移れば損はしないだろう。文化が異なって、不安を感じるのが当然のことだとしながらも、異文化コミュニケーションを避けたほうがいいとも言いづらいうだろう。国際化されていく近代の世界では異文化の他人と対話するのは避けられないとも過言ではない。なぜなら、異文化友人を作ることを通して世界に対する視野を広める必要がある

2. 英語に関する不安

3. 日本語に関する不安

それでも、対象者の中で気軽に異文化の人に話しかけるひとが何人もいるとわかった。しかし、異文化の留学生と対話する時、いくつかの日本人学生対象者は英語に関する不安を感じると分かった。英語に関する不安は日本人学生の対象者だけ感じないことだと言える。英語を母語としない人も感じる。また、留学生の中でもデータからして、日本語に関する不安を抱いていると分かった。

会話する時、相手は英語のネイティブの場合、心配しますが、じゃない場合は心配しません。（対象者14/男性/日本人学生）

話しかけられるまで待つ傾向があります。時々話しかけられます。もしかしたら日本語の問題でもあります。正しくない日本語を喋ってしまうのが恐れています。（対象者9/女性/インドネシア）

岩本法子（2009）は、Watson（1966）のコミュニケーションに関する恐怖を紹介している。コミュニケーションに関する恐怖は二つの種類がある、それはテストに関する恐怖と、判断されてしまう恐怖であると述べている。喋った外国語が間違えたと判断されたくないのは勘違いさせるメッセージ、それともなめられたくないというのは、やはり人間はプライドの問題なのである。外国語で喋るとき、誰でも間違えることがある。ネイティブさえ間違えることがありうることである。したがって、そのような不安を気にする必要がないと考えられる。Elaine K. Horwitz（2001）では不安は否定的に第二次言語習得と関係があると述べている。したがって、こういう不安をずっと抱いたら語学力も上達しないわけである。

つまり、恐怖を超えるために、試みるしかない。対話してみるしかない。外国語を使用すればするほど自信が高くなって、最初は大問題の恐怖が次第に減少していくだろう。勉

強ということは失敗するのが当然なので、失敗することを恐れているのが必要ではないだろう。

4. 日本語ができるかどうか（何の言語で話しかけるのか）迷う

面接で得られたデータからみて、日本語が不可能な留学生に話しかける不安を感じる日本人学生がいる。時に英語ネイティブの人との対話するのが不安を感じる人もいる。

英語に不安を抱いている日本人学生の対象者が何人かいる。外国人留学生と何の言語で話しかけ始めればいいのかという不安を抱く日本人学生がいるからなのではないだろうか。それでも、「英語を使いたい」、「外国の文化を知りたい」というような声が出てきた。

英語が上手じゃないので、そこが不安です。日本語を母語としない人と話す時、いつも不安を感じます。（対象者18/女性/日本人学生）

この現象をみて、彼女は相手はどんな言語ができるのか、自分でも相手が自分と同じ母語が喋れるかどうか、という不安が見える。何語で話しかければいいのかも迷う原因になるのである。それは自分が外国語（ここでは英語）に自信があまりないのではないか。

外国語に関する不安について、重迫隆司（2008）では学生の英語学力やコミュニケーション能力に関係している差かもしれない。もちろん、それでもコミュニケーションを変えられないわけではない、「語学力を試してみたい・上手になりたい」という熱心な発言を下対象者がいる。したがって、彼らはコミュニケーションスキルを向上したいという暗示も含めている。重迫隆司の研究では、外国人と話すときには、不安はあまり感じないようである。たとえば、アメリカやイギリスの人と恐怖を感じないで英語で話せる学生が55.48%、彼らがいても心地よく思う学生は33.56%となっている。最近の学生はマスメディアの影響や、対象の学校に外国人教師がいて日常的に触れ合うことの影響が考えられる。

要するに、コミュニケーションの不安、即ち恐怖を感じないようにするためにはよく外国語によく触れ合うことだと考えられる。最初はもちろん、不安など感じるが、触れ合えば触れ合うほど時が流れるにつれて減少するだろう。

日本人学生もちろん、外国人・留学生とコミュニケーションするために頑張らなければならないが、一方、それに対して欧米の留学生がこのようような発言もあった。

外国人、つまり留学生が話しかけ始めたほうがいいと思います。どうしてかという、日本人学生は留学生と会って、どんな言語で話しかければいいのか、日本語ができるかどうかという問題に悩まされるに見えます。（対象者25/女性/欧米）

この意見からみて、日本人学生は留学生と最初に会った時、もちろん何語で話しかけ始めればいいのかわからないのは当然なことなのではないか。したがって、留学生として、その日本人学生の相手に何語で話ければいいのかを意識させるために、外国人（留学生）から（英語か日本語で）話しかけ始めたほうがいいだろう。それを通して、日本人学生がその留学生に何語で話せばいいのかわかるようになって話が始まることもできると考えられる。

つまり、日本語・英語を母語としない外国人ももちろんいるし、日本人にも英語は母語じゃないので、外国語が下手でも、友人関係を保ちながら、お互いにたくさん練習したら不安もだんだん消えて上手になるだろう。

5. 部活ではどのような立場を取るべきなのかについての悩みを抱いている留学生

上下関係という文化はアジアのいくつかの国々でよく見られるものである。インドネシア学生の中でもその一つだとは言える。それでも、インドネシア人学生の上下関係は日本人学生ほど厳しくない。

出口朋美と八島智子（2008）は日本学生の上下関係が厳しいと述べている。そのようなことを知るある中国人とインドネシア人女性の留学生が、部活に入ってどのような立場をとるべきなのか悩んでいる。ここでの研究から得られたデータでは、大学寮では留学生は日本人学生にとって上下関係の中でどちらの立場で立つべきなのか明らかにした。留学生は「部外者」あるいは「下級生」という扱いをすればいいと語った日本人学生がいくつかいる。しかも、留学生は会議では意見を述べることを許されないと語った人もいる。このような現象の中で、留学生は日本人学生と距離感を感じるわけである。

また、本研究で面接から得られたデータからみて、留学生が部活に入って、日本人学生とのコミュニケーションがうまくいかない現象が見られる。それら「無視される」、「あまり話しかけられない」という悩みを抱いた留学生がいると分かった。なので、部活は日本人学生の友達を作るのにあまり効果的でないと述べた留学生が何人もいる。

部活は日本人の友達を作るために効果的だと思いますが、時間が厳しすぎるので、部活には入りません。一方、部活に入っても、留学生は部活で上下関係の現象があってどんな立場を取ればいいのかわからない。（対象者 4/女性/中国）

やはり、日本では上下関係というのは本格的な文化でもあって、避けられないものである。外国人・留学生は部活に入ってどう振舞えばいいのかなどに悩まされる一方、日本人学生も留学生をいかに扱えばいいのかも迷うわけである。

日本人学生の上下関係というのは問題だとは言えない。これがいいかどうかはどのような視野から見ることによって違うからだ。したがって、留学生からしてこのような制度を見直して欲しいと言われても、それがいいかどうか判断しにくい。むりやりその制度に入るとは難しい。外国人は外国人としての個性のスペースに恵まれた。外国人は上か下かにこだわらないで外個人は外国人であってもいい。日本人学生ほど縛られないし、自由にやりたいことがやれる（限界ある）。もちろん、敬語ができないことなどで目線で見られる人もいるが、良いことに、もっと広い目で見ることができる日本人学生と出会うチャンスがある。

留学生としながらも、楽な部活もかならずある。全部の部活がこのように迷わせるわけがない。ある学生があるスポーツ部活について次のように述べた。

スポーツ部活ではできるだけ自分から日本人学生を話しかけます。自分は新しい人なので、どうしても自分から話しかけなければなりません。
(対象者10/男性/タイ)

バスツアーというイベントに何回も参加しました。話しかけられることも少なくないです。友達を作るためにバスツアーが効果的だと思います。「Smiles for India Project」という部活に参加してこの部活は自分にとって一番良かったと思います。それはみんな全員同じ興味を持っているからだと思います。
(対象者1/女性/インド)

つまり、友人関係を構築するために、しなければならないのは、徹底的に努力すること。留学生として自分の趣味に合わせた部活が必ず見つかる。日本人学生と触れ合えば触れ合うほど、友人構築するチャンスが高くなって異文化の理解度も高くなるだろう。

B. 消極的な態度

1. 自分から話しかけない

日本人学生の対象者の中で話しかける前に色々考える人がいると分かった。

その外国人が日本語ができたら安心して話しかけますが、英語があまりできない外国人には話さない傾向があります。外国人留学生は大体日本語ができないというイメージがあります。(対象者8/女性/日本人学生)

基本的には自分は話しかけられないと話さないタイプです。
(対象者12/男性/ドイツ)

これらの意見を観察して動機の足りない問題と異文化コミュニケーションに関する恐怖と関係がると考えられる。留学生と友達になる動機は色々ある。特に相手の異聞感や外国語を知りたいというのも動機になれるだろう。以下の対象者のように、異文化の友人を構築したいその一つの理由は外国語を学習したいことだと述べた。

日本人学生の友達を作って、日本語能力を向上させる上、日本人の考え方や文化などを習いたいです。(対象者4女性中国)

データから、語学を学習したいという動機を持っている対象者が結構いると分かった。動機についてはB.1で論じている。

2. イベントのお知らせをあまり見ない
3. 連絡先を交換していても、遊びに出かけるのに誘わない
4. 部活や国際イベント(日本人学生と留学生の交流イベント)に参加しない
5. 日本人学生・留学生の友達あまり作ろうと思わない。

留学生と日本人学生の中で自分と異なる国籍の人と友達になりたいという気持ちを持たない学生がいる。彼らは海外に関する興味を持たないわけではない。この現象は、得られたデータからみると、人と関わるのが苦手な人もいるし、友人関係を構築するために、努力したのに失敗したと語った人もいる。

連絡先を交換して、そのあと一緒にカラオケしたり遊びに行ったりしました。しかし、自分からはあまり誘わないです。日本人学生の友達に誘われることが多いです。日本人学生も忙しいと思います。(対象者5/男性/中国)

日本人学生の友達を作ろうとあまり思いません。別に、作れなくてもかまいません。知り合うだけでも問題ないです。(対象者6/女性/スリランカ)

留学生の友達を作ろうと思いませんが、できたらいいと思います。色々な考えをシェアしたりディスカッションできますから。（対象者13/男性/日本人学生）

日本人学生だけじゃなくて、色々な人と友達になりたいです。日本語で喋りたいという理由もあります。（対象者25/女性/ハンガリー）

この現象をみて、外国を知るといふ動機が見えないのである。Sandara Graham、Bernard Weiner（2006）では、動機というのは人間が何かを達成する習慣というものであると述べている。つまり、友人を作るのに必ず動機が必要である。なぜ必要だというと、今の時期で異国人・異文化の人と友達になる必要がないと思ってもいいが、国際化されていく近代の世界では異文化の他人と対話するのは避けられないだろう。

作りたいという気持ちはあります。仲良くなれなかったらどうしようという不安はありますが、それよりわくわくする気持ちのほうが強いです。私にはない文化や考え方、価値観を知ること、自分の視野が広がるだけでなく、自分自信のことを知るきっかけにもなるからです。（対象者22/女性/日本人学生）

留学生友達を作りたいのは、英語の能力を向上する機会として使用できる一方、互いに色々な知識を交換できますから。（対象者14/男性/日本人学生）

英語を上達したい、日本語を使いたいなど、動機はなんでもいいと考えられる。

さらに、英語だけではなく、ほかの言語も勉強することができる。世界というのはもちろん共通語が英語だと知られているが、ほかの言語を勉強する価値もある。英語以外の言語も動機にもなるのが不可能ではないだろう。

また、データからして、動機があつて強くないが、友人構築には未だに興味を持っている留学生・日本人学生がいると分かった。

国際交流イベントには参加しません。もみじをあまりみませんから。でも、外国人と関わるためには日本語モデルクラスというサークルに参加するわけなんです。（対象者15/女性/日本人学生）

異文化の友人を構築するために、方法が多くあるのが事実である。それらは国際イベント、部活、サークル、バイトなどである。したがって、部活が苦手な人は国際イベントを選べばいいし、国際交流イベントなどが苦手な人はバイト先でも友人が作れる。バイト先で友人を構築した留学生がいることもデータから分かった。

バイト先で日本人学生の友達が作れました。
よく一緒に遊んだりおしゃべりします。（対象者5男性中国）

さらに時間がないので、それらの交流に参加できないという学生もいる。確かに学生は誰でも忙しいという原因は述べられるが、本当に動機が強ければ時間が作れると考えられる。したがって、次のような発言では友人構築に対する動機はあまり強くないに見える。

クラブには入りません。国際イベントにもあまり参加しないです。それは自分の研究でも忙しいからです。もっと時間あれば参加したいと思います。
（対象者12男性ドイツ）

一方、異文化友人を構築することを通して、外国語の学習の動機ともなっていると考えられる。Zoltan Dornyei (2009) では、動機は言語を学習する主な動機ともなる。十分な動機がないと、学習者が長時間目的を達成することができないと述べている。外国語を勉強することもできる。筆者がこれを踏まえて考察して、異文化の友人を作るのにも、十分な動機をもたないといけない。動機となるものは何でもいい。英語が上手になりたいという動機でもいい。データから得られたいい動機を述べた日本人学生がいる。

そこで、会社員、教師などになっても海外の人と必ず接触することがある。その前に、異文化の関係・友人関係の必要性を把握したほうがいいだろう。また、自分で動機を生むことである自分が本当に外国の人と友人になりたい何か動機を決めればいい。他にも動機が多いから、一つ何か同期になればいいのではないかと考えられる。

C. 留学生・日本人に対する個人的な偏見や否定的な意見

1. 日本人学生は消極的・留学生から避ける傾向があると思う留学生

データから、留学生は日本人学生をみて、日本人学生があまり留学生と関わりたくない、留学生を避ける傾向があると思込んでいることが分かる。留学生がこのように判断したのは日本人学生が彼らにあまり近づかない、対話しない、なのではないかと考えられる。

日本人学生は内向的だと思うので、機会があれば取り敢えず自分から日本人学生に話しかけ始めます（対象者 5 /男性/中国）

普段は自分から話しかけます。それは日本人学生は最初に自己紹介をしないからです。研究室と一緒にいてもなかなか話しかけられないです。
（対象者 1 1 /男性/中国）

上述したように、コミュニケーション恐怖は主な原因となっている。対話の中で、文化背景が異なる両方の話者の間に不安が生じる。コミュニケーション恐怖に関する解説は A.1 で論じている。おまけに、日本文化は欧米文化と比べて、オープンな文化ではないと知られている。したがって、留学生側からも日本人の考え方など配慮していかに努力してコミュニケーションしたほうがいいのではないかと考える。

2. 日本語で話しかけても英語で返される

ある中国人の留学生が日本人学生に日本語で話しかける時、英語で返されると不快感の気持ちを感じながらそう語った。このような時、この現象を見るとコミュニケーションがうまくいかないとは言えるだろう。

研究室でも、日本語で話しかけても英語で返します。（対象者 1 1 /男性/中国）

Zoltan Dornyei (2009) のなかでは Williams (1994:77) は、言語を学習ことは、ほかの分野を学習するのと異なるに決まっている。それは主に社会が主なリスクとなっているからである。結局、外国語を勉強することは、スキル、ルール制度、文法だけではなく、社会と文化を適応するプロセスも含めている。これらは学習者に大きな影響を与える。

基本的に、英語ネイティブの留学生はもちろん、英語がわかるので、ある意味で問題がないが、英語を母語としない留学生は困るだろう。特に広島大学では中国からきた留学生は日本での生活を送るには主な言語として日本語を使用するのが事実である。留学生は日本に来て滞在して日本語を勉強して流暢になりたい。それは当然なことである。一方、日本人も英語を学習したいというのも当然なことでもある。なので、外国語を勉強することは誰でもそういう権利を持っている。しかし、上述した現象を見て、うまく行かないコミュニケーションが見られる。

したがって、外国語を勉強するには（ここでは日本語と英語）、多くその目的の言語で話すことだけではない。ここで、どの言語で喋ればいいのかには注意しなければならない点もある。相手はどの背景を持っているのかを知るためには、話しかけられるときのその瞬間なのである。適切な対応が必要である。相手と合致をしないで、望ましくない対応をしてしまったら勘違いが生じるだろう。

要するに、ほとんどコミュニケーションをする際、相手ができる言語や相手を持っている意図などに合わせて、言語を選んだほうがいい。日本人学生もちろん英語を学習したい。一方、留学生も日本語を学習したい。日本語ができる、英語を母語としない留学生は英語で喋りたくないわけではない。今の世界の国々が仕方なくて国際化されて英語は必須だと考えられる。したがって、両者の合致の上、互いに語学を学習できる環境を作って友人関係も継続すればいい方法なのではないだろうか。

D. 自分自身に対する否定的な見方

1. 大勢の人と交流するのが苦手
2. 自分が社交的ではないと思込む

大勢で交流会を行うのは苦手だから。（対象者20/男性/日本人）

話しかけるより、話しかけられることが多いです。自分の性格にも関係があって、あまり社交的ではないと思います。（対象者2/女性/セルビア）

人はそれぞれの性格を所有している。それでも、異文化の友人を構築したいと言いながらも、自分が社交的ではないなど、と認識する対象者もデータから分かった。これを見て、やはり、異文化の友人と出会うためには、選ぶことができる色々な方法がある。例えば、以下の対象者は大勢の異文化の人と交流しないで、個人的な関係を作ることができたと分かった。

会話パートナーというプログラムや国際イベントや生花部活にいます。
（対象者9/女性/インドネシア）

大勢の人と交流するのが苦手な学生、社交的ではないと思う学生は、この会話パートナーというプログラムが適切なのではないか。留学生にも、大勢の人と交流することが苦手

な人がいれば、少数の部活に入ればいいのではないかと考えられる。自分の性格が分かる人はただ自分だけではなく、友達もわかるので、彼らのアドバイスを聞いてもいいし、それとも留学生の悩み・問題に対応できる大学の相談窓口（大学の相談窓口は大学生の状況が分かるから）を利用して相談にのってもいいと考えられる。

結論

日本人学生と留学生の対象者が広島大学で異文化の友人を持っていると回答したのはほとんどである。また、異文化の友人との友人関係構築から、異なる文化や考え方や外国語を学びたいという動機が明らかに見られる。そこにとどまらず、異文化間の友人関係を構築するために、部活や国際交流イベントなどを通して努力していると分かった。

しかし、対処者の中には異文化友人を構築しようとしている際、未だにコミュニケーション障壁にぶつかっていると分かった。本研究では、それらの障壁はコミュニケーションの不安、消極的な態度、相手に対する偏見、自分に対する否定的な見方という問題にあることを発見した。不安を感じるその主な原因は言語や相手の文化背景が知らないことである。語学力に自信がない、相手の文化背景が知らないので、話しかけるかどうか、どう振舞えばいいのかと迷い込む。

それらの障壁を超えるためには、偏見を抱えるよりも、相手と自分をより知るためには、異文化の人ともっと対話をすればするほど相手と自分のこともより把握できるだろう。さらに、これをきっかけに、語学力も段々高くなるだろう。また、異文化友人を構築するためには、十分な動機が必要となっていると分かった。データからみて、十分な動機がないと、それらの障壁を超えることができない。十分な動機さえあれば、徹底的に相手と対話することができる。触れ合えば触れ合うほど相手の文化背景と考え方などが見てくるだろう。したがって、留学生・日本人学生は双方自分の動機となっていることを決めたほうがいいのではないかと考えられる。

現在、国際化されていく世界では、異文化の人と接触する機会が多くなっていく。したがって、異文化の人と共生するために、異文化理解を知る必要がある。世界に興味を持った大学生たちは、異文化の人と接触その機会をきっかけに、自分の異文化に対する理解度・視野を広げることができるだろう。

参考文献

- 中山千夏（2007）『友達のつくり方』河出書房新社
- 大橋敏子（2008）『外国人留学生のメンタルヘルスと危機介入』京都大学学術出版会
- 出口朋美・八島智子（2008）『論文 実践共同体としての大学寮における 留学生と日本人学生の 対人関係』 *Multicultural Relations*
- 重迫隆司・吉田一衛・三浦省五（2008）『英語学習における不安について』 福山大学文化学部紀要

- 岩本法子 (2009) 『Japanese university students attitudes toward English speaking situations』 日本英語英文会
- 園田智子 (2014) 『日本人学生と海外大学生のアサーション度に関する調査研究』 異文化教育学会
- 潘英峰・義永美央子 (2014) 『日本人中学生の異文化受容態度とその関連要因』 異文化教育学会
- Elaine K. Horwitz (2001) 『Language Anxiety and Achievement』 Cambridge University Press
- Graham, Sandra and Bernard weiner (2006) 『Theories and Principles of Motivation』 National Science Foundation
- Song Wang, Xiu jie, Sun Chang, Yuan Liu (2010) 『Intercultural Analysis of Communication Anxieties Encountered by International Students in the United States』 University of Rhode Island
- Taylor-Powell, Ellen & Marcus Renner (2003) 『Analyzing Qualitative Data』 University of Wisconsin
- Zoltan Dornyei (2009) 『Motivation in Second and Foreign Language learning』 Thames Valley University, London